



発行2009年8月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hazaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

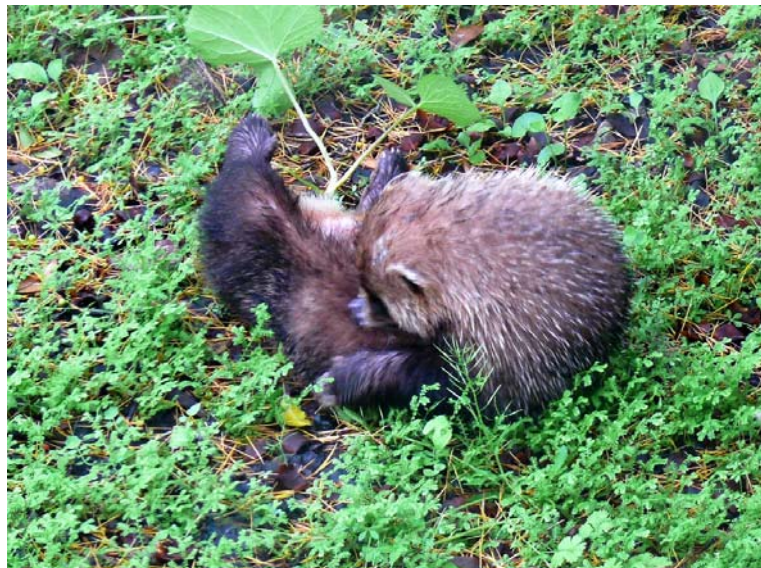
NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

.....
ハンザキ研をめぐるスター⑩

アナグマ

アナグマも旨らしい。と言うのはよく言われている“タヌキ汁”の本当の中身はアナグマであるということである。この話は当ニュースNo.31にも書いたように、タヌキの肉は臭くて食えないと言われているが食えないと言うほどのことは無かった。ただ、タヌキ汁が旨かったという話も聞いたことがない。昔からムジナとかマミダヌキと呼ばれ、混同されることが多いので「同じ穴のムジナ」なんていう言われ方をしている。分類上もタヌキの仲間だとばかり思っていたらイタチ科なのだそう。どうもあまり敏捷でもないシズングリした体型からは考えにくいがラッコやカワウソ、テンなどに近い動物だそうである。

名前のおり深い穴を掘ってねぐらにしており、何代にも渡って同じ穴を使い続けるので古い穴は網目状になり、キツネなど他の動物もその一部を使って住み込んでいるそうである。「同じ穴のムジナ」と言われると悪いイメージだが、事実逆のようだ。



図鑑には夜行性と書かれているが、人気の無いハンザキ研の校庭では日中も悠々と姿を見せてくれる。この写真は校舎の裏庭で一心に毛づくろいをしているところだ。廊下の窓越しに撮影したが全く気づかれなかった。肛門と尾の間に“肛門腺”があって強い匂いを出すと言われ、その辺りの手入れをしているのかもしれない。雑食性で果実・種子から両生類・爬虫類（特にヘビを好むそうでマムシも食べてしまう）など色々な物を食べる。水田の畦の土中に生みつけられたシュレーゲルアオガエルの卵塊が徹底的に掘られて食われていた。地上のモリアオガエル卵も同様で、やはり木の枝に生み付けるのがいいようだ。



写真1 濁流に翻弄される照明器具



写真2 ハンザキ橋も後1流



写真3 河川ステーションも水没



写真4 大量の流木



写真5 減水後の河原には砂浜が?



写真6 大量の土砂が堆積



写真7 保護センターのポンプ・ピットのカバーも曲がる



写真8 はんざきブロック内も土砂が



写真9 布団籠状になったカニ籠



写真10 水溜りでハンザキの2歳3歳幼生保護



写真11 河原から救出したカワニナ



写真12 大活躍中の奥藤事務局長

河川の増水

平成 17 年からハンザキ研周辺の川の様子を見てきたが、この 5 年間で最大の大水に遭遇した。8 月 1 日、午前 6 時の見回りでは小雨で川は少し濁り気味ではあったが水位は変化無かった。構内を一回りパトロールして朝食中から豪雨になってきた。9 時にハンザキ橋から見た河川は濁流となり夜間観察用の照明装置が水にあおられていた。既に電球は 5 つ共無くなっていた。急いで引き上げたがソケットの上半分から先が消えていた。ただし、1 つだけ残っていたのは昔ながらの瀬戸物のソケットで、プラスチック製品は見事に破損して電球と共に無くなっていた。1 球 1.2 万円のダイオード球 6 万円分の損失である。申し訳ないことです。

橋の中央部にある橋脚にぶち当たる濁流のしぶきが橋の上にまでとどき、24 時間監視カメラまであと 1 分ほどに迫っていた。こんなに急激な水位の上昇は、上流にある関西電力黒川ダムからの放水のためだろうと思ったが、後刻、ダム下に住んでいる方から放水はしていないとの情報をもらった。後日、姫路市立水族館から受け取ったダム情報資料を見ても 6 月から 8 月 8 日までの間の放水量は毎日 0.06 トン/sec であり、河川の水量維持のための最少限の放水量を示している。雨量も、1 日には 149 ミリであったのが、9 日には 141 ミリとほぼ同じ降雨の状況であった。ただし、10 日の放水量は 3.54 トン/sec という大きな数字が示されている。0.3 トンが川の中を歩ける限界である。

1 日の時点では関西電力のダムの貯水量が少なかったために、蓄える方向で放水量が少なかったのかもしれない。10 日には、もうこれ以上貯水することが出来ないために大きな放水が行われたと言うことだろう。この辺りがダムの洪水防止能力（治水）の限界を示しているように見える。もっとも、黒川ダムは関西電力専用の揚水式発電所のための上部ダムですから、治水には関係の無い存在なのでしょう。

2 日の降雨量は 27 ミリで、河川の水位も急激に減少したがまだ川の中には入れる状況ではない。河川ステーションの水が引いたので被害状況を調べる。流失物は人工巣穴の導入路であるヒューム管内のクリーニング用具（5 本のエンビパイプの先に円盤を付けたもの）だけです。しかし、観察用の人工巣穴は 50~60 センチの土砂で埋まっている。その前面に設置された“はんざきブロック”も完全に埋没している。中にハンザキが閉じ込められているといけないと思って砂の除去を始めたが、土砂の中には草木がぎっしり混ざっていてスコップの先が入らない。重たい水中ポンプを運んできて水で流すことにしたが、大量の土砂は簡単には流せないし、人工巣穴の出入り口を塞いでいる砂利や岩は到底人力では排除できない。NPO の奥藤事務局長が 3 キロ離れた黒川本村から小型のユンボを 1 時間かけて走らせてくれた。7 日ほど毎日毎日土方作業をして人工巣穴やはんざきブロックの内部を点検したが、幸いなことに死体は無かった。その代わり土砂が満杯になっていたの、これを取り出すのが大変だった。ほぼ整備復旧が終わったところで 9 日の夜からの大雨で再び土砂に埋もれてしまった。

この間に、1日の夜間ハンザキ観察会は中止になったが、5～9日は小学生10名が参加する4泊5日の“キッズラボ”・・・夏休みの自由研究3コースが実施されたり、8日には親子水辺観察会6組19名参加が行われた。これらのイベントの合間合間に土方作業を続けてきたのだが、それも水泡に帰してしまった。ハンザキの繁殖期も迫ってくるので集合してくる個体の確認をする目的でのカニ籠トラップを仕掛けたり、月例のモンドリ調査と大忙しの日々であった。9日には降雨の天気予報が出ていたのでカニ籠は集めて河岸に紐で縛っておいたが、1つが流失し残りの9つは土砂に埋もれて“フトン籠”のようになっていた。第2回目の復旧作業は10日ほどかけて終わったので、なんとかハンザキの産卵には間に合いそうであったが、肝心のトラップにハンザキが入らない。アンコ淵の巣穴も黒主が姿を消してから決まった新しい主もできず集合が見られないのかもしれない。上から見るアンコ淵の底には大量の土砂が見える。穴も埋まっているのかもしれないなと思いつつも潜水してみる暇が無く、月末になってカニ籠に入った1匹のハンザキを穴の出入り口付近に放してみたがUターンしてしまう。やはり口が土砂で埋まっているようだ。

9月になって、水中写真家の内山りゅうさんがNHKクルーと来たので水中土木作業を実施してもらった。木片や土砂・砂利がぎっしり詰まっているということであった。まずは、淵の底に溜っている大量の土砂をジョレンを使って掻きだし、4寸のエンビパイプを穴に入れることが出来たが、奥のほうまで土砂がたまっているようなので、水中ポンプのホースを差し込んで排除を試みた。出てくる水が透明になったのでOKとばかりに1匹のハンザキを淵に放すとスムーズに入っていた。繁殖期前にオスが好適な繁殖巣穴を探してクリーニングしてメスの来訪を待つのであるが、今回は内山主の活躍であった。

しかし、まもなく大量の土煙と共にハンザキが出てきたのである。まだまだクリーニングが出来ていなかったのだ。これが9月の2日昼間のことだったが、24時間監視カメラの録画を始めた3日の夕方にはハンザキの入巣が確認された。しかし、入るとすぐに猛烈な土煙が流れ出してくる。主が本格的にクリーニングを始めたものと喜んだ。4日の観察では出入りに際して土煙が出ることもなくなり、新しい主(内山主と命名)の出入りも頻繁になって周辺のパトロールに精を出している様子と共に周辺に数個体が姿を見せ始めた。いよいよ繁殖パーティーのお膳立てが整ってきた感がある。

ハンザキ橋の上から見るとアンコ淵周辺には掻き出された大量の綺麗な砂利が見える。ハンザキのオスにはこんなに多くの砂利の排除は出来ないだろうが、これまでにはもっと凄い大水があつて巣穴が埋まったこともあつたのではないかと思う。詰まった草木が腐敗して崩れて穴が開通していったのだろうか？ それにしても平成16年の台風では今回よりも洪水量は多かったのに、半年後のアンコ淵には大倉主が納まっていたのである。その時には出入り口が埋まらなかったのだろうか、どんな流れでこの細長い巣穴の中に土砂が入ってしまったのだろうか？ 大きな岩盤の隙間に出来た黒主の体がヤット通過できるくらいの狭い入り口なのだが、今回の内山主の作業では3.5寸の奥行きが確認された。奥の間を覗き見たいものだ・・・照明付の小型水中カメラがほしい！！

キッズラボ 2009 年

子供たちが 4 泊 5 日で、民家に泊まったりしながら夏休みの自由研究をする試みも 3 年目になった。今年は「オオサンショウウオと河川生物」や「山野の植物」、「農業体験」の 3 つの課題を選んで参加するものである。10 人の小学生が神戸や大阪、地元から応募がありスタッフの他に兵庫県立大学・三宅研究室から応援の学生が多数あった。

オオサンショウウオ・コースは例年の人気課題であるが、植物の葉を使った電子レンジによるしおり作りやマタタビをネコに食わせて酔わせる実験、地元名産の“生野紅茶”作りと試飲の農業体験も好評だった。私の個人的な思いだが、これらの全てを子供たちへ体験させたいと思う。ハンザキ研を核にした活動であり、全員にオオサンショウウオのことを知ってもらいたいし、その他にも出来るだけ多くの経験もさせてあげたいと考えている。

保護者の方からのアドバイスには、小さな子供の日々の状況をブログなどで知らせてほしいと言ったものもあったが、音信なしは無事の知らせと言う言葉どおりに考えてほしいと思いました。しかし、保護者の方からのメールには出来るだけ即時に応答していくことを考えていくべきかと考えています。また、子供たちへの多くのメニューをこなす中で、やってもいいことといけないことの判断をスタッフ全員が認識しておく必要があると思いました。

.....

オオサンショウウオの夜間観察会

オオサンショウウオは夜行性の大変強い動物です。昼間は水槽の中ではほとんど動かずに過ごしています。当研究所内の兵庫県オオサンショウウオ保護センターでも、日中は隠れ家にじっとしているだけで生きているのかどうかも分かりません。ところが、暗くなったセンターの中では日中のんびりしていたハンザキが生き生きとして動き回り、餌として入れられているアマゴやニジマスを捕食します。この昼と夜との大きな変化を見たり、自然の河川で野生のハンザキを観察するイベントを 3 回実施しています。

昨年も 3 回の観察会を開催しましたが、滋賀県から広島県の間から平均 30 名の参加者がありました。同じ特別天然記念物のコウノトリやトキは、見に行けば優雅な姿を見ることが出来ます。しかし、夜行性で水中生活者のハンザキにはお目にかかる機会はそんなありません。と言うことで、時間的にも不自由な夜間の観察会になりますが、今年も 3 回の計画を立てました。現実を目の当たりにされた参加の皆さんは感激の声をあげています。30 年以上もハンザキを追い続けている私にしても、何回見ても感動的なシーンです。皆様方も、是非機会を作って来年こそは見に来ていただきたいものです。夜陰の日陰の立場にいるハンザキですが、さすがに日本の河川の生態系の中で頂点に位する生き物であることが実感できると思います。夜の闇に川底でうごめくハンザキに救いの手を差し伸べてやりたいものだと強く思います。皆さんにも是非一度ハンザキ研の見学をお勧めします。見れば分かる、理解していただけたらと思うのです。

ハンザキ研日誌

2009 年 8 月

- 1 日
- ・ハンザキ研開所以来最大の大水、数時間で水位が上昇し、アンコ淵のナイター照明が流されてしまった。橋の上にまで水が跳ね上がる。
 - ・オオサンショウウオ保護センターのポンプも土砂に埋もれて給水ストップ
 - ・河川ステーションの水溜りにオオサンショウウオの幼生 (全長 12・16 ㎝の 2 匹) と 65 ㎝の個体が漂着し保護する。貴重な幼生のデータが取れた
 - ・オオサンショウウオの夜間観察会、大水で中止にしたが 1 組 2 名参加
 - ・高砂スポーツクラブ 40 名見学に
 - ・生野ダム下流で土砂崩れがあり通行止めとなり、NPO 事務局会議延期となる
- 2 日
- ・地域のボランティアによる校内の草刈実施、昨年の 4 名から今年は 10 名で
 - ・榎谷建設がオオサンショウウオ保護センターのポンプピット内の土砂排除作業始まる
 - ・姫路市立白鷺小学校・上野教諭来所、5・6 年生への講演受諾
 - ・河原の打ち上げカワニナの救出作戦、1 時間ほどでバケツに半分くらい収容
- 3 日
- ・キノコ観察会のための予備調査第 2 回目、横山・宇那木両先生と奥藤事務局長
 - ・愛知県瀬戸市のレディオ 3 Q の収録、名古屋学院大学の古池教授との電話対談
- 4 日
- ・大阪府池田土木事務所の小野技師、天王川水系北川のオオサンショウウオ調査保護について来所
 - ・朝来市議会議員・湊本氏と播磨町議会議員 2 名視察に来所
 - ・兵庫県やまびこの里、14 名見学に
 - ・2 才のイシガメを校庭のビオトープ山で発見
- 5 日 2009 キッズラボ開催 (～9 日まで 4 泊 5 日) 10 名参加、兵庫県立大学多数の学生の応援あり
- 7 日 カニ籠・モンドリ調査、セット
- 8 日
- ・親子水辺観察会実施、6 組 19 名、ウエスコ阪田講師によるレクチャー
 - ・キッズラボの打ち上げでバーベキューとキャンプファイヤー
- 10 日 大水第二波、カニ籠 1 基流失、9 基土砂に埋没
- 11 日
- ・兵庫県オオサンショウウオ保護センターの月例健康診断、1 個体行方不明
 - 1 個体のマイクロチップ脱落? 三重県から清水善吉さんと谷口真理さん応援
 - ・カモガワ・ハンザキの 1 年ぶりの健康診断、43 個体と 2 幼生、死亡 2 で異常無し (田口研究員と大阪府立大生のボランティアによる)
- 12 日 ハンザキの餌用のアマゴ入荷。チョウモドキの発生開始
- 13 日 愛知県教育委員会の杉浦さん視察に来所、NPO へ入会有難うございました
- 16 日
- ・お盆で見学多数、4 名の NPO 法人への即日入会あり
 - ・なんでも鑑定団の収録で中島誠之助さん生野へ (東京の学校法人芝学園生物部 OB 会会長で、私は同・生物部名誉顧問)

- 20 日 ・ 広島大学の長澤教授来所、西日本で2例目のチョウモドキのサンプリングに
・ 神崎中学校・平岡教諭など 5 名見学に
- 22 日 GS-287 終了 (7 月 31 日～)
- 23 日 大阪府立大学にて「日本表面科学会」で“両棲類の表面”について講演
- 24 日 キノコの横山先生の手土産のエダマメの苗、食害される (犯人はノウサギ?)
- 25 日 ・ 小椋酒店車でビールと共にハンザキ研に配送 (GS-288 開始)
・ ハンザキの首切り死体の新鮮なサンプル、与布土川から朝来市教育委員会・宮崎さん搬入、マイクロチップ (0646-6AE5) が入っていた、全長 645 ミリの♂
・ アンコ淵のナイター照明復旧
- 27 日 簾野の人工巣穴チェック、4 基中 3 基はヘドロが、この 15 年間で最大量溜っていた。今年の繁殖は望みがなさそうである。1 基は蓋の上に土砂が溜り雑草が生えていて開けることができなかった
- 29 日 ・ NPO 事務局会議、8 名出席
・ ハンザキ研ニュースNo.43 刊行・発送
・ オオサンショウウオの夜間観察会、4 組 8 名参加 (三重県、豊岡市、夢前町等)
- 30 日 ・ 奈良県食品衛生検査所の森本さん見学に来所
・ 六和会 (生野駅周辺の六区の 45~69 歳の親睦会) のバーベキュー大会に招待
- 31 日 ・ モンドリ定期調査実施
・ カニ籠定期調査実施

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

今月とはとにかく連日の土方作業であった。自然の災害は人力の到底及ばぬ所がある。小型のユンボが活躍してくれねば河川ステーションの復旧はおぼつかなかったことだろう。それにしても、最初の大水の後始末が終わったところへ 2 回目の大水があったのには参った。正に 1 週間の努力が水泡に帰したと言うものだった。1 日の方が水量は多かったが、10 日には朝来市や佐用町で大きな災害が発生した。同じ市内であるために多くの方から心配の電話を戴きましたが、ハンザキ研の在る所は瀬戸内側で災害のあった市内は日本海側の円山川沿いである。円山川は、川の傾斜度がゆるく普段はゆったりと流れているが、大雨があると水の行き場が無くなり災害をもたらすことになる。平成 16 年の本流と支流の出石川の破堤は記憶も新しく、昨年 3 月に災害復旧工事が竣工したばかりである。

今回の災害では、再び多くのハンザキたちが流されたことだろう。佐用町では兵庫県自然保護協会のメンバーが調査に入っていたので、今後の追跡調査による結果が期待される。人災の方が優先されるが、河川の生き物のことをもう少しは考えねばならないと思うが。